

# PLAYBOY

年商8億! オーナー筒見待子(22)

愛人バンク“タぐれ族”  
が逮捕されない秘密

KAL 撃墜は  
米ソスパイごっこの  
犠牲だった!!

あの女優がいま脱いだ

大空真弓  
スクープ・ヌード

著名人100人はどちらを望むか

田中角栄(元首相)  
有罪か無罪か

私が選ぶブス・ベスト10

林真理子

スプリンター 9秒96の生理

カール・ルイス

来日するロックの伝説男

ボズ・スキャッグス

超LSI頭脳のヒミツをさぐる

西和彦(マイクロソフト副社長)

22歳OLの鮮烈リアルSEXライフ

こころさされて、私  
エクススタシー

特写レポート・この熱い女たちに、我々は応えられるか?

11

# 西 和彦

マイコンは今や商戦のるつぼにある。今我々が手にしているマシンの60%ほどを設計した青年が時代の寵児<sup>ちやうじ</sup>となっても不思議ではない。どう成功したかよりは、なぜ作れたか問うのが我々の狙いだった。

紙数の関係と全体のバランスから、その部分はそっくり省かざるを得なかったが、たいへん面白かったのは、「コンピュータにも文化の違いによる型がある」という話だった。したがって、「僕は日本のコンピュータはつくれると思うけど、アメリカのコンピュータはやっぱりビル・ゲイツ、マイクロソフト社長」しかつくれないという感じがする」と西和彦は言う。比喩的に言えば、コンピュータ（西がただコンピュータというときは、マイクロコンピュータの汎用型のいわゆるパーソナルコンピュータを意味している）が「日本人」としてのアイデンティティを持つわけだ。その具体的なイメージはまだつかめないが、一年の半分をマイクロソフト社の副社長としてアメリカで暮らし、しかも高校までに日本古典文学大系の全巻を読破したという人の言うことだけに説得力がある。

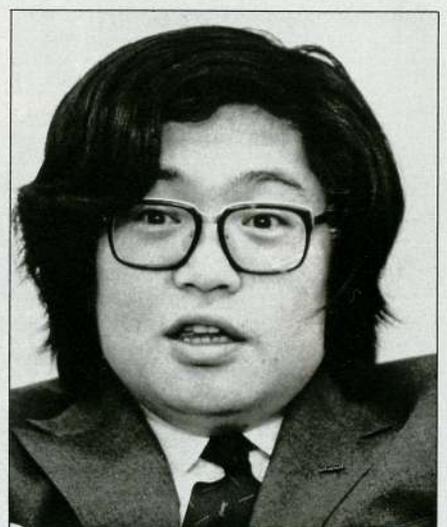
もともと日本のパソコン業界は、「マイクロソフトの掌の上で踊っている」と言われるくらいに、ソフトの面で自立性を持っていなかった。そこへ持ってきてMSX（注）シヨック。一部では、西和彦（27歳）を水先案内人にして、ついに黒船が東京湾に入ってきたという受け取られ方をしている。だが西自身は、6月に行なわれたMSXの発表会を「MSXはもうマイクロソフトのものじゃない、日本の家電業界のものですよ」という申し送りの儀式だと言う。つまり、日本人の、日本人による、日本人のためのコンピュータの自立的発展の道が初めて開かれたというわけだ。

「説得の名人」といわれる西和彦が相手だけに、せいぜい眉に唾つけて聴いたつもりだが、そういう西の真意を疑うに足る根拠はないように思われる。

（注）現在各社互換性のないソフトをマイクロソフト社方式で統一。それに対応する新仕様のマイコンの呼称。

PB いまわれわれの周辺には、コンピュータ・ハムレットがうじゃうじゃいるわけです。買うべきか、買わざるべきか……。モデルチェンジのスピードが速いから、よけい迷っちゃやう。西さんだったらどうアドバイスしますか。

西 早く買ったら早く使えて、それだけプラスになる部分はあると思います。パソコンを使ったら、2時間かかる仕事が1時間で終わった、そういう部分はあるから、そういうプラス



なんでマイクロ・ソフト社のソフトがすごいとかいう感じでみんな言うかといったら、コンピュータで音楽やるとか、コンピュータ・グラフィックスをやるとか、いろんなままで思ってもみなかったことができるようになったわけです。最近。むかしコンピュータにやらそうと思ったら1千万ぐらいかかったんですよ。ミニコンを使ってやったことがあるけれど、IBMのセンターに行かなきゃならなかったんです。

撮影・高橋 昇

いままではソフトウェアとハードウェアが互いに絡み合って生きてきたわけですね。つまりメーカーを異にすると、ソフトもハードも全く互換性がなかった。ところが、ソフトとハードがお互いに独立することになると——つまりMSXですが、ハードの開発が終わるまで待たなきゃいかなかったのが、待たなくてもよくなるわけ。だから5年間かかったのが、わずか2年半でもできるようになるわけです。

ひとつは自分のために働いてくれる人のために、自分のためにいろんなことを考えてくれる人のために働くね。自分のためにいっしょう、ひと肌脱いだるかという人がいてくれると思うんですよ。そういう人のために働く。それともうひとつは自分の属している集団というかな、会社とか日本とか、コンピュータの業界とか、地球とか、そういうところにコントリビュートっていうか貢献したいと思いますね。



日米間をひんぱんに往復している。時差ぼけはもはや感じない。「とまとるとバッテリーと行くかもしれない」

# 勉強せんとわからんもの作っておつて、売れると思つう？

がもしあれば、当然買うべきだと思います。ただ、コンピュータのテクノロジーはまだまだ進むでしょうね。というのは、いちばん初めにテクノロジーが実用化になって、実用化が終った時点で商品化になって、商品化の

次が社会化。社会化というのは、結局それが商品として世に出ることによって社会にインパクトを与えて、生活が変わる。最後に、それがあつたのが当り前という状態が、日常化です。テレビでいえば、街頭テレビの時代が実用化の段階で、三種の神器といわれた時代が商品化だ。今や完全に日常化されて、うちにはテレビがないなんていえば、逆にエッ!? ということになるわけですよ。

で、パソコンというのはいま、商品化の段階に入りつつあるんじゃないかと思つています。だから、非常に一般的な意味では、もう少しテクノロジーが熟して、車でいえばイージードライブで値段も安いと、そうなるから買った方がいいと思つてイージードライブじゃ乗った気がしないという人もいます。けど、その辺は何ともいえない。PB 西さんたちがこの6月に発表した

MSXの話題にすでに近づきつつあると思つただけで、それはもう少し後に回しまして、いわゆるパソコンたるものを持つとあなたの生活はこう変わるんだよ、というイメージを与えていた方がいい。車やテレビなら使用目的はある程度はつきりしてるわけですよ。だけどパソコンというのはいつた何をしてくれるのか……。

西 コンピュータというのは、ちようど白いキャンパスですね。ユーザーはそこに自由に画を描くことができる。画材屋さんとしては、そこにどういふ画を描きなさいとは言えないわけですよ。だから、このキャンパスは絵具の乗りがよろしめおまつせとか、そういう感じじゃないですかね。だけどそれは、車だつてテレビだつて、ある程度同じでしょう。免許も取つた、車も買った、どこへでも行けるけど、じゃあどこへ行くのつていうのが大事でしょう。テレビだつて、どこ見たつていいけど、じゃあ何を見るのつていうのが大切なわけですね。

PB なるほどね。コンピュータ・ハムレットの悩みというのは、まだそこまで行つてないわけだ。要するに、O A革命だ、M E革命だといわれて、パソコンのひとつもいじれないようじゃコンピュータ社会で落伍者になるという、強迫観念みたいなものがほとんどですね。

西 それは週刊誌が悪い。そういうふうにしてきたでしょう。コンピュータなんか、なかつたつてもええよ。知らんでもええのよ。だいたい、知らんとあかんような、勉強せんとわからんものをつくつておつて、売れると思つう？

PB 売れるんだもん、だつて。西 あんなの売れたうちに入りませんよ。誰も使えるようなものをつくらんと商売になりませんで。僕は、ぜつたい誰でも使えるようなものをつくるのや。

PB 強迫観念なんかでコンピュータを買うことはないよ。西さんにそれを言つてもらうと、ホツとするやつがだいいいますよ。(笑)

西 そういう話じゃなくて、コンピュータが何をしてくれるかといつたら、人間にはリーチをできるだけ上げようという、メンタルな本能みたいなものがあると思つて、行動半径を広げたい。それは何か。足を強くするしかないわけですよ。それが車です。それから電話というのは、自分の耳、口を遠くに伸ばす機能があります。テレビはいまはワンウェイだけど、遠くの山の上とか海の深いところまで見せてくれるわけでしょう。これは目の機能の拡大ですね。

テレビの中継車に乗つたことがあるの。ピットとカメラを切り換えると、ワツすごい、こんなにいろいろ見えるのかと思つて、ものすごくエキサイトしましたね。自分の目の行動半径がものすごく拡大された。そうすると、こういうことです。テレビ電話というのはフイックスしているけど、カメラがあつて、そこに電話がついていて、その人間が移動しているのと同じでしょう。それが100個ぐらいあつて、展示会でも何でもいい、自分が見たいところへ自由に派遣できたらすごいでですね。

それで、あと何が残つているかといふと、手と頭と自分の舌だと思つてわけです。手はやつぱりロボットでしょうね。ロボットでも、人間の手のリリースとしてのロボットです。私は、いちばん初めに出現する個人用ロボットは、お茶汲みロボットとか、犬のお散歩ロボットとか、いろいろあるでしょうけど、僕

# BASICに何ができないかは作った人間が知ってる

は机の上を片づけるロボットがいいですね。Zライトみたいな形でついていて、いつも働きやすいように机の上を片づけてくれる。そういうのをつくっているんですけど。

舌の機能を強化するのはむずかしいけど、たとえばその薬をのむと、同じものが3倍ぐらいおいしく食べられるという薬があったら売れるでしょうね。吉野家の前に自動販売機があって、100円入れるとその薬が出てくる。

それをのむと、吉野家の牛丼がマキシムのフランス料理よりもおいしかったという感じになるわけです。(笑)

PB 味の素がつぶれちゃう。セックスの快感が3倍になる薬の方が関心あるけどね。

西 そういう快感のことは僕の商売じゃないから。(笑)というのには、セックスの快感も脳の領分には違いはないけど、今のところコンピュータはそこまでめんどうはみられない。し

かし、ここから本論なんですけど、コンピュータというのは人間の頭の延長です。脳の働きのすべてはカバーしないにしても、車というのは人間の足の延長だということだしたら、コンピュータは人間の頭の延長だと思う。いわゆる大型コンピュータじゃないですよ。車が足の延長だと言ったときに、トラックなんて意味してないわけです。やはりシテイとかファミリーアとか、そういう感じの車を意識

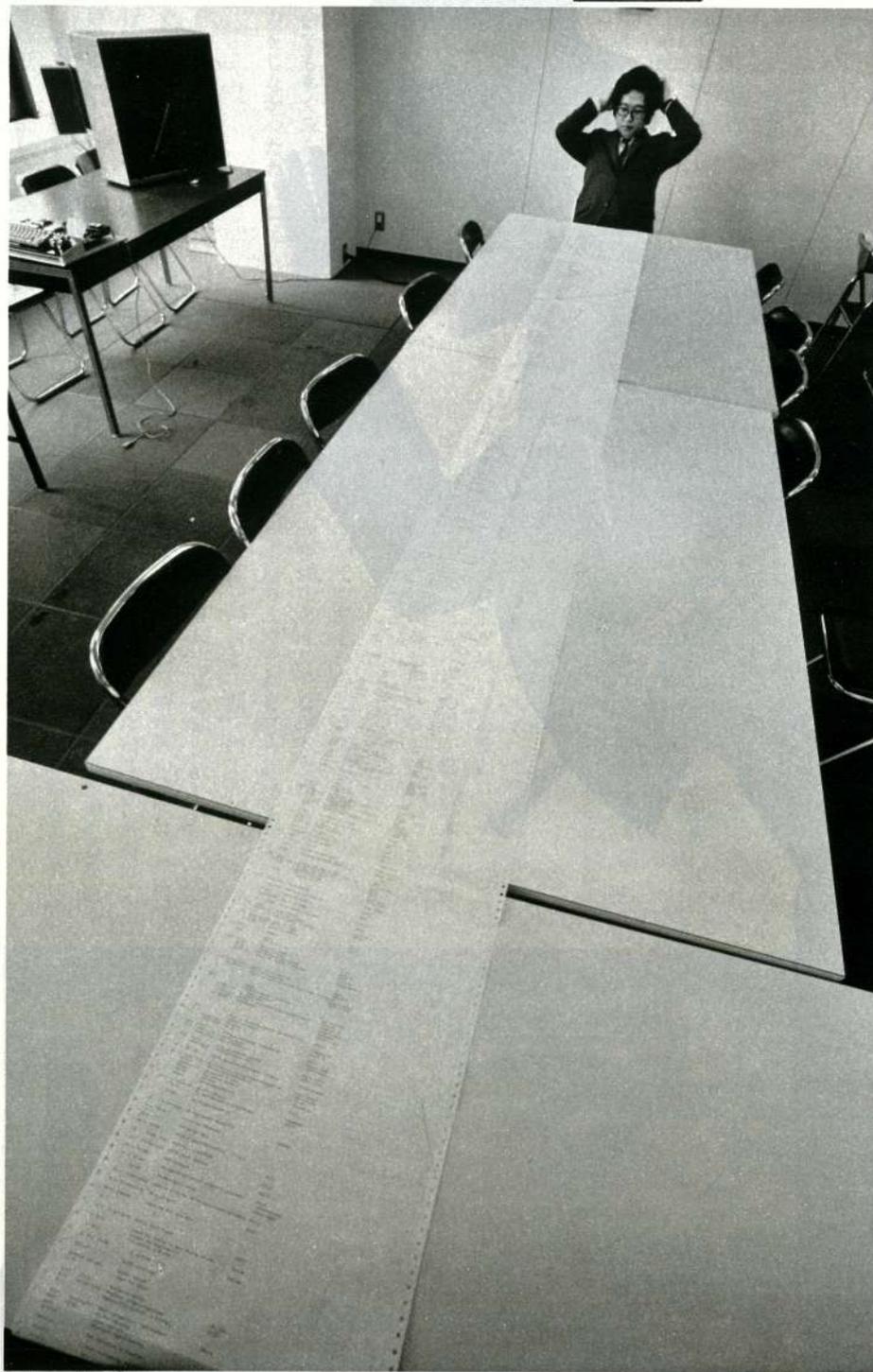
しているわけでしょう。それで、人間の能力というのは、大きく分けて3つあると思うんです。ひとつには記憶——覚えること。もうひとつは、覚えたことを目的に応じてくっつけたり離したりすること——編集。いわゆるノリとハサミですね。そして最後が創造だと思えます。そうすると、私は、コンピュータというのは、将来的には、記憶と編集が非常にやりやすい機械、それで、創造行為が増幅されるような、非常に人間にとってつきあいやすい機械、そういうものでなきゃいけないと思う。

PB いまのところはあんまりつきあいやすくないですからね。第一ことは通じない。コンピュータ言語も数々あつて、西さんたちのマイクロソフト社の場合はBASICですね。で、ある日、BASICのBはビギナーズのBであると気がついたりすると、やれやれまだこの先があるのかと……。

西 だから、コンピュータをやる前にBASICを勉強してこいなんて、私は、つくった人間として、そんなことをいっぺんも言うたことがないですよ。BASICに何ができて何ができないかというのは、やっている人間がいちばん知っているね。あれはコンピュータの本質ではない。ないというか、本質はもつと違うところにあると思う。

PB いずれは自然言語に取って替わられて、消滅していくべきものですか。

西 最終的には、言語というのはコンピュータの言語じゃなくて、自然言語という形で英語で入れる、日本語で入れる、そういう形になつていくんじゃないかと思う。しかし、それはBASICが消滅するということじゃない。コンピュータをもう少し細かいレベルで使つていこうとか、コンピュータと初めて出会うときにどういう言葉を使うかといったら、



日本では朝5時起床、9時から執務、1日10人ほどと会う。スケジュール表(写真)は見ただけで気が遠くなる

# コピーができないものには興味ない

BAS I Cなんか、ある種の可能性がありません。ずっと残っていくでしょう。

いまの段階で、なんでマイクロソフト社のソフトがすごいとかいう感じでみんな言うかといったら、コンピュータで音楽をやるとか、コンピュータでグラフィックスをやるとか、コンピュータで通信をやるとか、いろいろなままでも思ってもみなかったことができるようになったわけです。最近、むかしコンピュータに音楽をやらそうと思ったら1千万ぐらいかかったんですよ。ミニコンを使ってやったことがあるけれども、コンピュータにグラフィックスをやらそうと思ったらIBMのセンタリーに行かなきゃできなかったんですよ。それが家庭のテレビでできるようになった。

それは、BAS I Cという言語を僕らが拡張していった、音楽をやるにはこうしたらいいとか、そういう試行錯誤をやってきたわけです。それはある程度落ちつきましたけど。そういう、より人間的なもの、よりみんなが求めるものに対する努力をした歴史が、BAS I Cの歴史ですね。

で、アカデミズムの人々は、そういうことはいままで一切やってこなかった。やってきたかもしれないけど、それをひとつでも多く、一台でも多くみんなのもとに届けようとする努力をしなかったわけね。

**PB** 西さんはどうして、同じコンピュータでも、いまおっしゃったアカデミズムの方に行かなかったんですか。

**西** なにか子供のときから、自分がつくっているものは複製ができなければイヤだという気持がありましたね。だから、私はスピーカ

ーをつくったことがあるの。何がハッピーだったかといえば、スピーカーをつくったことじゃないですね。スピーカーをつくるときに、それをまたどうしてか、設計図をちゃんと書くわけです。それで、だれか友達が来たら、もうひとつつくりたいならこれでつくれ、そういうことをしていた。だから、使った材料もいつでも店で手に入るもの。そういう意味で、どんなにそれが素晴らしいものでも、自分ひとりのもの、コピーができないものというの、あんまり興味がなかったですね。やっぱり、自分がつくってそれが正しかったら、正しいものをたくさんつくったら、みんなハッピーになりますね。そういうふうな本能的なものがあつたんじゃないかと思えますね。

**PB** 一方ではハードウェア志向もあつたわけでしょう。その最初のあらわれみたいなものを覚えてますか。

**西** ロボットの絵本でした。あるページにはロボットの外側が描いてあるわけです。次のページを開いたら、その中が描いてあるわけです。メカニズムみたいなものがね。それがものすごく楽しくて。

**PB** いくつぐらいのときですか。

**西** 幼稚園のときじゃなかったかな。その前かな。本屋さんでそれを立ち読みしたんですよ。それで、母親と一緒に出て、50ぐらいまで歩いたときに、「あの本が欲しい」と言っていたんです。うちの母親が言いますけど、何かを買ってくれとねだったのはそれが初めてだつて。その本を買って帰って、繰返し繰返し見た記憶がありますね。それは非常に強烈な体験でしたよ。



53 東京の「ASCII」で副社長として働く。ここでは天才というよりは、経営者のカオになっている。壁に「時間はお金だ、ソフトもお金だ」とある

# 小学校3年か4年で電卓を分解したのが始まりだった

**PB** 分解少年っているでしょう。オモチャでも時計でも片っぱしからバラバラにしちゃうやつ。

**西** 僕は分解少年だったかもしれないけど、組立て少年でもあったね。バラすときに、その順序を書きとめておいて、それをフィードバックして組立てるんです。

**PB** それはやっぱり異能児だね。普通の分解少年は、組立てる意思はあるんだけど、手がつけれなくなると、親に怒られておしまひなんです。そういうものを分解したんですか。

**西** 時計でしょう、ラジオでしょう、テレビでしょう、電卓でしょう、洗濯機でしょう、冷蔵庫でしょう、車でしょう、インターホンでしょう、クーラーでしょう、ポンプでしょう……いろんなものやりましたね。いま初めて思い出したけど、いろんなものやりましたね。

**PB** それはもう分解魔だな。そんなもの組立てて返さなかったら事件になっちゃう。分解した中では何が面白かったですか。

**西** 電卓だったですね。テレビはわからなかった。電卓のときに私は非常に興奮を覚えたね。

**PB** それはどういう意味で。

**西** 自分が何か問いかけると結果が返ってくるという事です。こういうことをやるには、どういうふうをやったらいいかというプラックボックスを自分で解いていくということがあって、非常に面白いですよ。電卓では数字しか出てこないけど、自分が何か話しかけると応答してくるような、そういう機械になるんじゃないかなあと思いましたね。

**PB** 即ちコンピュータですね。

**西** 電卓の次がミニコンです。おやじが学校で使っていたものを夜中に使わせてもらった。

**PB** 電卓のときはいくつぐらい？

**西** 小学生ですね。3年生か4年生ぐらいかな。

**PB** まいったな。僕は中を見てもさっぱりイメージが浮かばない。お父さんの学校というのが神戸の私立須磨学園で、創立者のファミリーだから学校の中に家があったわけですね。

**西** そう。だから自分が受けてきた教育は非常に特殊だったと思います。たとえば自分のところの学校の音楽室に行くでしょう。そうすると音楽の先生が何でも教えてくれるわけ。

オーケストラのオーケストレーションとかね。それで音楽にこつていたらときもあつたし、カメラにこつてカラーの現像まで自分でやるようになるし、絵を描いていたし。音楽と絵とロボットと、あとロジックと。だから、いまコンピュータに何をさせられるかというのを、幼児体験として全部私はしてきたと思います。気がついたらしてたわけですよ。

**PB** ハードからソフトへ、ソフトからハードへ、自由に飛びかいたがね。理科系、文科系と分けてもいいけど、普通はどっちかへ片寄っちゃうものなんです。

**西** いわゆる求めていた時期だから、何でもやってみたかったんじゃないかと思えます。

僕がいちばん最初に覚えた英語が聖書の言葉なんです。現代語に訳すと、「求めよ、さらば与えられん。探せよ、そうすれば泉を見出すであろう。戸を叩けば開けてもらえるであろう」意味もわからなくて読んだんだけど、あとで考えると、結局、自分がいちばん求めていたときに、物でなくてもいいんです、知識にしても与えられたというか、ものすごくラッキーでした。

**PB** しかし、それだけいろんなことをやったら、ずいぶん金もか

かったでしょうね。

**西** かなり使ったでしょうね。しかし、甘やかし放題、与え放題という感じじゃない。そのころ、ちょうど自分のところの学校の校舎を建てていて、節約しなきゃいけないわけです。トレパンをはいていくでしょう。ぼくの

トレパンは継ぎが当たっているわけ。友達のははいているトレパンは真っ白で、きれいでね、いいなあなんて思った。それでも、何か欲しいというとき、その理由をちゃんと説明すれば出してくれるわけ。また僕は、そういう予算獲得のための折衝みたいなものがうまかったね。(笑) おやじやおふくろを納得させるにはちよつと弱いなというときは、おばあちゃんのところへ行く。(笑)

**PB** お父さんやお母さんには、西さんの教育について、理論というか、一種実験意識みたいなものがあつたのかしら。

**西** それはわからない。ただ、僕がやっていることについて、非常によく話を聞いてくれた。それも、全然わからないで聞いてくれるんじゃない。筋道なんか非常によく理解して聞いてくれた。うれしかったですね。子供心に、家に帰って誰かに自分のやったことを聞いてもらうというのは、非常にうれしいことです。我慢とかじゃなくて、話すことよって自分のやったことの意味を確認しているんですよ。

**PB** 東大にすんなり受かっていたら人生変わってましたか。

**西** わからないけど、ただ、東大に入っていたら卒業はしてでしょうね。東大卒というのは非常にいいタイトルになるから、それは捨てないでしょうね。そのかわり、挫折も知らないし、自立もできないで、いまごろ神戸の親のもとでごろごろしながら女狂いでもしているかもしれない。(笑)

**PB** やっぱ大挫折でしたか。

**西** 1回目が非常にショックでした。東大しか受けなかったし、当然通るものだと思っていたし。2回目は覚悟してたから、慶応の経済とか、いろいろ受けた。第2志望の早稲田理工科に入ったわけです。

**PB** それが1976年(昭和51年)。マイクロコンピュータにかかわっていくには、それより早くても遅くてもいけないという、どんぴしやりの時期だったんじゃないですか。

**西** そうですね。コンピュータのクラブに入っています。会って話をしていけると、こんな大きなIBMのコンピュータなんかいやだなあ、おい、ひとつ小さいのをつくらうやという話とかね。それで、大学の先生たちはアメリカのアカデミックな文献をいろいろ読まれているでしょう。アメリカの電気学会の論

# (日本に)来ないかと言ったら、用があるならそつちが来いと

文集とか、しょっちゅう見せてくれた。広告も見せてくれた。そういう広告の裏に人材募集とか書いてあるんですよ。マイクソロプロセッサーが始めたりして、どうも面白そうだなと思いましたね。

**PB** 自分が面白いと思うと、例によって人に広めずにはいられない。そこでコンピュータホビー誌「I/O」の創刊になるわけですね。

**西** みんなを引っばっていくというか、自分の考えていることをみんなにアピールして、その当否を問うというか、そういうのは自分の性に合っているんじゃないでしょうか。

**PB** 間もなく西さんは「I/O」を飛び出して、いまの「ASCII」を創刊するわけですね。「I/O」は営業的には成功してたわけでしょう。

**西** たしか76年の11月から出し始めて、4月にはスプリットしてたんじゃないでしょうか。そのとき非常に成功してまして、金も2千万円ぐらいもうかっていったのかな。

**PB** あんまりそういうときに飛び出す人っていないけど。

**西** 経営方針の違いでしょうね、いちばん大きいのは、お金に対する考え方の違いでしょうね。必要なものにはお金を使わなきゃいけないと思うわけです。もうひとつは、働いた人間に対して平等に返していかなきゃいけないと思うわけです。そういうところの問題ですね。つらい経験だったけど、基本的な主義主張を曲げてがまんしちゃいけないということ、身をもって体験しましたね。だから、人とうまくやっていくためには小さいことはがまんしなきゃいけない、それはもちろんそ

うだけど、基本的なポリシー——じゃなくて、フィロソフィーというかな、そこが違ったところと仕事はできないということですね。

**PB** 「ASCII」を足場にして直接マイコン業界にかかわっていきこうという意図は、最初からあったわけですか。

**西** そんな大それたことは思っていないで、来月号が出ることしか考えていなかった。もうひとつは、「ASCII」に決める前に、いちばん初めにタイトルとして考えたのは、マンスリー・マガジン・オブ・マイクロコンピュータ・サイエンス——サイエンスをやるうと思っただけです。マイクロコンピュータが出てきたらどうなるんだと。マイクロそのものはどうなるのか、マイクロがどんなインパクトを与えるのか、そういうサイエンスの部分をやるう、それがテーマでした。で、毎月毎月つぶれないようにと。利益のことなんか考えたことなかったですね。

**PB** ビル・ゲイツとは同い年でしたね。どういう印象でしたか。

**西** そんな大それたことは思っていないで、来月号が出ることしか考えていなかった。もうひとつは、「ASCII」に決める前に、いちばん初めにタイトルとして考えたのは、マンスリー・マガジン・オブ・マイクロコンピュータ・サイエンス——サイエンスをやるうと思っただけです。マイクロコンピュータが出てきたらどうなるんだと。マイクロそのものはどうなるのか、マイクロがどんなインパクトを与えるのか、そういうサイエンスの部分をやるう、それがテーマでした。で、毎月毎月つぶれないようにと。利益のことなんか考えたことなかったですね。

**西** 非常にまじめな感じがしましたね。オネストというかな。あともすごい賢い感じがしましたね。ものわかりがいいというか。いわゆるあなあのものわりのよさじゃなくて、非常にシャープに考えてオーケーという感じの即断即決で、非常にいい感じがして、人格的に非常にいいなと思って。それで、何となくこれはうまくいくんじゃないか、そういう感じを受けましたね。

**PB** ホビー誌の域を脱したわけですね。

**西** あの人も、うちがいいんですよ。僕のうちなんかとはけた違いにリッチなんですけど、それを自分のチャレンジとは別に考えている感じですね。

**西** 初めからずっとあるのは、こういうコンピュータを人は求めているんじゃないだろうか、こんなコンピュータがあればいいな、そういうところですね。それも初めは人に言っていたわけですが、こんなのがあったらいいですよって。それから、言うだけじゃなくて、メーカーに行つて、こんなのをつくつたらいいですよと言いつつ始めて。だけど、あまり聞いてくれませんか。趣味でやってる人間が何を言ってるんやと。

**PB** そうすると、どつちかという雑誌の取材に近い形で行つたわけで、マイクロソフト社のソフトの日本での販売権をもらったというのは、むしろヒョウタンからコマみたいな感じで……。

**PB** そうでしょうね、それは。いちばん文句があるのはソフトウェアで、じゃソフトウェアでもつくろうやという話になった。ソフトをつくっていると、これは日

**西** ビルは、日本ではソフトは売れないと言いましたものね。

**PB** ああ、そうか。だめでもともとという感じだったわけですね。で、すぐ売れました

**西** ひらめきやアイデアがうかぶと、瞬間、子供のような表情に戻ってしまう



# お前幾ら売ったか言ってみい、それでおしまいやね

か。

**西** いや、なかなか買ってくれなかったですね。いちばん最初にリコーが買ってくれましたね。リコーの山本専務と昼間さん、大西さん、今はもうえらくなられてますけど、ずいぶんお世話になりましたね。リコーといろいろ仕事をして、そういう人たちが、おまえは市村という名前を知ってるかというわけ。知らんと言ったら、市村清を知らんのはけしからんという話になった。

**PB** リコーの初代社長で、経営の神さまといわれた人ね。市村学校というのがあって、マスコミ業界にもずいぶんお弟子さんがいます。

**西** そういうことで手とり足とりビジネスを教えてもらったことがあります。

**PB** 西さんのセールスのうまさは、子供のときご両親やおばあちゃんからお金を引き出すときの説得のテクニクがものをいってるという人もいますよ。

**西** どういうのかな、いま35から45までの人とは、僕はあんまり話が合わない。僕、20代でしょう。だから、一回り上の人はだめなんです。二回りか二回り半上の人だったらいい。自分のおやじクラスの人でなきやだめなんです。

**PB** それにしても、2年とたたないうちに、マイクロソフト社の総売上げの40%を西さんひとりで稼ぐようになったというのはいすごいですね。

**西** それでバイスプレジデントになりましたね。バイスプレジデント・ファースト。(極東販売担当の副社長)それからバイスプレジデント・アジアになって、次に、販売だけ

じゃなくて、バイスプレジデント・プランニングになりましたね。ちょうどIBMのパソコンをビルとふたりでやるときでした。それから、プランニングから変わって、ニューテックノロジー。ニューテックノロジーになったときに、同時にボードメンバーになりましたね。3番目でした。取締役になったのは。だから、ビル・ゲイツ、そのパートナーのポール・アレン、その次でした。

**PB** 外からきた日本人が急速に人をとびこして出世するわけだけど、摩擦なんかはなかったんですか。

**西** それは実力の世界だから。そんなものエエかっこするやつがいたら、バカ! と言ったらおしまいや、おまえエエかっこするけど、メモ廻さんのはどういうわけ? 廻さなかつたら本当に困るのはお前だよ、とバチーンといつてやるわけ。そうすると、コロッと失礼しました。これははつきりさせなきやだめですよ。お前いくら売ったか言ってみいというわけ、こっちはいくら売ってるんだぜと言つたらおしまいや。

**PB** それだけ西さんの開拓した日本のマーケットがでっかくなつたということですね。そのでっかくなつたマーケットを打つて一丸にすることによつてさらに活性化しようというの、つまりMSX構想であると、そう解釈していいわけですか。

**西** そうですね。いままではソフトウエアとハードウエアというのが互いに絡み合つて生きてきたわけですね。つまり、メーカーを異にする、ソフトもハードも全く互換性がなかった。ところが、ソフトがハードから独立して、ハードがソフトから独立するというこ

とになると——つまりMSXですが、ソフトはハードの開発が終わるまで待たなきやいけなかったのが、待たなくてよくなるわけ。だから、5年間かかっていたものなら、わずか2年半でできるわけです。これはすごいよ、確かに。いろんなことがパツとできちゃう。ソフトはソフトで自分で進化を始める。2倍出てくる時期が早くなれば、市場はもつともつとうまく発展すると思います。

**PB** 来るべきコンピュータ社会といわれる中で、MSXというのはわれわれにとつてどういう意味を持つんですか。

**西** さつきコンピュータは人間の頭脳の延長であるという話で、とくに記憶と編集。このふたつの能力を飛躍的に増大させると言いましたね。その話を続けると、3つ目は通信の問題、コミュニケーション。最後は人間の娯楽の問題です。つまり、記憶、編集、通信、娯楽という4つの分野で、コンピュータというのは非常に大きなインパクトを持っています。

**PB** ただ、インパクトというのは必ずしも人間に心地よい作用を持つとは限りませんね。MSXが人間がこんなことを言っちゃいけないんだけど、家の中のいろんな端末から、ありとあらゆる情報が土石流みたいに流れ込んでくるなんていうのは、ちよつとした悪夢ですね。

**西** それはそう。ものすごく強い精神力と集中力というものが要求されますよ。大変ですよ。だから、そのときに精神力の闘いを拒否した人はドロップアウトやね。そのかわりというか、さつきの4番目の娯楽、エンタテインメント、これはもつともつと面白いことになりません。欽ちゃんやエンタテインメントじゃなくて、一方的に受けるだけじゃなくて、

使う人が反応して、その反応がスクリーンに出て、スクリーンが見て、それに反応する。そういうフィードバック、ポジティブなフィードバックをすれば、フィードバックがあるがゆえに心地よい現象が起きるでしょう。

おもちゃのコンピュータで、エンタテインメントのときに、単にボタンを押せば弾丸が飛ぶというんじゃない、もつといろんなエンタテインメントの話があると思うんです。

それを追究するためには、そういうことをいろいろ何べんも何べんもやってみるような場が必要でね、それがMSXです。ひとつの新しいメデアを実験するための場です。

**PB** 大型コンピュータのネットワークによる社会の再編成が、かなり人間疎外を押し進めるものだとすれば、同じコンピュータでもMSXは人間回復のお役に立ちますよ、というのかな。西さんが大型コンピュータが嫌いな理由がだんだんわかってきたな。

**西** 僕なんかもう怖くてやつてられないもの。(笑)

**PB** 6月にMSXに関する最初の記者会見をやりましたね。あれはどういう意味のものですか。

**西** あれはMSXはもうマイクロソフトのものじゃありません、MSXは日本の家電業界のもので、そういう申し送りの儀式なんです。12月の発売に向けて、9月の末にもう一回発表をやりま。

**MSX** というのは僕の夢だったんです。安い、楽しいパソコンをつくりたいというのが夢だったんです。僕でも買えるようなものか、誰でも買えるようなね。断然5万以下です。しかし、MSXが本当に素晴らしいというふうな世の中に受け入れられるには3年かかると思う。

**PB** それはどうしてですか。

# 時々会社の床の上に寝てるんですよ

**西** 今年の末に出ますけど、ソフトが本当に出そろうのは来年の末でしょうね。その出そろうソフトを見て、いろんなメーカーが必死になって、ハードが安くなって、再来年の末に安いハードが出てくると。3万とか5万とかね。だけど3年かかりますよ。

**PB** 狙いは広く一般大衆ですか。

**西** いや、やっぱり若い人ですね。6つぐらいから36ぐらいまででしょうね。いくら楽しいものでも、やっぱりコンピュータに合わない世代っているでしょうからね。

**PB** 3年でどのくらい普及すると思いますか。

**西** 世帯数において15%から20%ぐらいいくと思います。

**PB** そうすると今のVTRなみになると。

**西** なるでしょうね。ぜひしたいと思います。楽しいもん。

**PB** 今はどうか、今もどうか、アメリカと日本を行ったり来たりの生活ですね。どっちがリラックスできますか。

**西** アメリカでしょうね。断然アメリカでしょうね。

**PB** たとえばこのインタビューもアメリカでやったら変わってきますか。

**西** いまはすごいリラックスしてますから。いまはすごいハッピーですね。

**PB** ということは、東京にいるときはほとんどリラックスするときはないと。そういえば東京には家がないでしたね、ホテル住まいで。

**西** ええ。シアトルは自分の家ですから、家でくつろぐこともありますし、テレビを見て

いるときもあります。それでいいんじゃないですか。僕は東京に家ができるのが怖いね。早く帰ってね、いやあ、今日は疲れたな、なんて言って、「欽ちゃんでも見ようか、欽ちゃん！」とか(笑)

**PB** 怖いって、何が怖いんですか。

**西** 自分に自信がないことって、すごい大きいから。いくらやってもそうよ。人が成功しているって言っても、それは人が言ってるだけで、自分でそうは思わない。

**PB** ほんとに？

**西** 思わないね。やっぱり、ひよつとしたら会社つぶれるんじゃないかか思いますね。

やっぱりそういうところに自信がないから、またつねに気をつけてるところがありますね。努力するしね。だって、今こそホテル住まいだけど、会社の床の上に寝てたんですよ。毛布にくるまって、寝袋はあつたかな、電話帳が枕で2年間。朝8時ごろ電話がかかってきて、「おはようございます、アスキーです。フニャフニャ……」って感じてましたね。

**PB** 体によくないね。

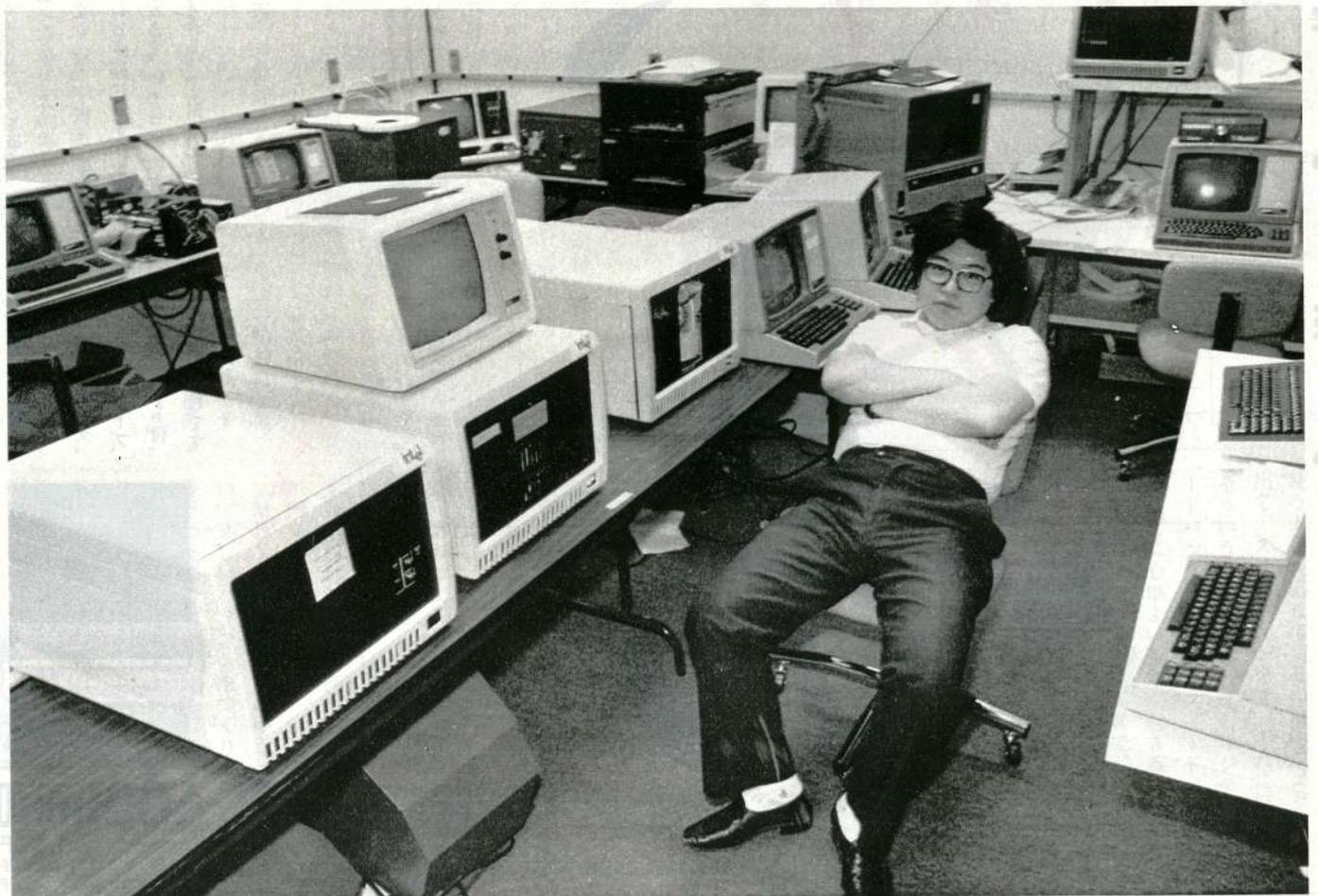
**西** だから1年以内につべんぐらい倒れてましたね、立ちくらみというやつで。

**PB** 食いものもひどいんだ。

**西** カップラーメンばかり。吉野家の牛丼とか。

**PB** そういえばさつきも吉野家の牛丼が出てきましたね。

**西** だけど、全然苦しいと思わなかったな。今も思わないしね。今でもいつでもすぐ戻れますよ、そういう生活に。全然こわくないしね。だからときどき会社に泊まる。会社の床の上に寝てるんですよ。警備員が来て、死ん



アメリカではスタイルも変わる。考えるにふさわしいリラックスの姿勢となる。インタビューもこのくだけたポーズで行なわれた。つまり寝ころがって…

# ある、ある、もう1億、2億もすつた、とどがあるよ

であるんじゃないかって、足で蹴つてみたりする。(笑)

PB そんな思いをして、あなたは何のために働いているのかって聞かれたら?

西 僕は、ひとつは自分のために働いてくれる人のため、自分のためにいろんなことを考えてくれる人のために働く。自分のためにいっちょひと肌脱いだるかという人がいてくれると思うんですよ。そういう人のために働く。それともうひとつは、何か自分の属している集団というかな、会社とか日本とか、コンピュータの業界とか、地球とか、そういうところに自分がコントリビュートしているのかな。貢献したいと思いますね。大義であるでしょう。そういうところで役に立ちたいという。名譽とかそういうのを抜きにしてね。

PB 何かというと「日本」ということが出てくるとおっしゃってただけ。

西 出てくるね。父親は日本人だし、日本という国は私にとつてかけがえのない国です。一生アメリカ人と一緒にいるならんと思う。なれんと思う。

PB 日本への思い入れが強すぎて、かえって日本ではリラックスできないみたいだね。お金は働く動機とはあまり関係してないですか。西 会社で働く動機にはあります。個人の場合、僕は思うけど、預金が1億くらいあつたらいいんじゃないですか。ハッピーよ。あとはみんな会社のものです。たまるでしょう。そのくらい。あと10年くらいやってればね。いつ倒産するかもしれない。

PB どうしてそう思うのかな。西 思うよ。いつ倒産するかもしれないけど、そのときに自分が過去言ってきたこと

が、倒産したあとでも、「ああ、こいつは自信がなかったんだな」というあたりで一貫してないとよくないと思うわけよ。

PB もしかしら、自分はあんまりツキすぎた、こんなツキがいつまでも続くわけがないという感じなのかな。

西 ものすごいラッキーだったのは確かです。何がいちばん成功の原因かといったら、僕はいちばん迷わずに挙げるのは、ラッキーやったということですね。もうひとつは人と出会ったということやね。いいパートナーにいい人にたくさんめぐり会ったということでしょうね。これもラッキーのうちかもしれないけど。

ただ、ツキといつても、外から見えるのは当てる部分だけで、当たらない部分は見えないから。失敗も多いですよ。お金をドブに捨てたこともあるし。

PB 大きいのはありましたか?

西 あるある。もう1億、2億すつたこともあるし。

PB 最近ですか。

西 最近かな。もうそれは勘弁してほしいんだけどね。(笑) やっぱあるね。それは自分が個人的に使ったというんじゃない、気をつけてたらそこら辺でもう1億ぐらいもうかるのがあるからなかつたとか、そういう感じよ。オポチュニティ・ロスとかね。

PB 西さんはいま27ですね。MSXがものになるのに3年かかったとして30。30前につかいかいことをやりとげてしまった人のそのあとの人生って、相当しんどいんじゃないかという気がするんですけど、たとえば5年後に何をしているかというイメージみたいなもの

はありますか。

西 僕はやっぱりコンピュータをつくり続けているでしょうね。1年にひとつぐらいね。あと5台ですよ。5台がいかに世界を変えるかという……。ただ、それは別に、最近、自分は何をするべきかという話をいろいろ身近な人とするんですけど、自分は究極的には教育をやりたい。やっぱり自分の家が学校で、親が教師でしょう。そういう自分の家の仕事と、自分のいまやっている仕事を、どういふふうにならなくかみ合わせていくか、やっぱり考えますね。すごく考えますね。

たとえばね、今でも社員の人に、一緒に仕事をしている人にとときどき言われることがあるね、あなたがいたから私の人生は変わった。つまり、僕と出会わなかったら、自分にどういう能力があるか、自分にどれだけのことができるかわからなかったらどういふか。僕はそのとき非常にうれしかったですね。うれしかったし、何か非常に責任を感じましたね。

PB そういうところは確かに非常に教育者のですね。

西 僕は、経営とは教育だと思ってますね。会社をもうけさせようとか、そういうことじゃなくて、そこにいる人間の可能性をいちばん引き出すことをするにはどうしたらいいかということを考え続けたい、絶対にうまくいくと思う。人材開発会社、能力開発集団という感じじゃないですかね。

PB それをもっと純粹に教育の場でやってみたい。ただ、西さんの場合は、生まれ持った才能もあるだろうし、それと理想的な教育環境がたまたま合致した、稀有な例じゃないかという気がするんですけどね。

いかという気がするんですけどね。

西 そんなことはない。僕は、成長期を通じて、自分が特殊な子供だなんて思ったことがない。むしろ自分のごくごく平凡だと思っていた。ただ、平凡な子供でも、自分の好きなこと、やりたいことというのはあるもので、僕の場合は、英語風に行えば、やりたいことに対してことごとく「窓が開かれ」ていた。

だから、小学校時代はすごいハッピーでした。中学校のときもハッピー、大学のときもハッピーだった。だから、申しわけないんだけど、現在の小学校教育がどうか発言するほどの知識もないし、そういうものへのアンチテーゼを打ち出そうといった大それた気持もない。ただ、自分が身をもって体験したことだから、もう一回そういうことができるような教育の場を設定しようと思えば、それはできますね。

PB 親子とか、自分の家庭の場ではどうですか。家庭を大事にしない主義じゃないんですか。うん、結婚して。家庭とかプライベートなことは一切しゃべらないことにしているので、あまり書いてほしくないんですけどね。わかんない。

PB 今のフル回転ぶりじゃ、あれもこれもというのは無理かもしれません。

西 だんだんあきらめの境地に入ってきた。ただ、僕思うんですけど、一生懸命に仕事をしていて、みんなのためにいいことをして、国のためにいいことをして、それでアンハッピーになるとは絶対思わない。そういう変な自信はありますね。何か仕事して走つてるときにコトツといく(命がつきる)かもしれないけど、僕はそれでハッピーだと思います。